

地域のために命をかけた人々

正保元(1644)年、馬堀村(西蒲区)名主田辺小兵衛は馬堀用水を開削し、水不足に苦しむ村々を救った。後年、幕府から用水開削を咎められた長岡藩は、小兵衛の独断によるものであるとして彼を捕え、獄死させた。

天和元(1681)年、長岡藩領曾根組割元高橋源助が西川からの用水路を開削したが、用水路の水流を堰き止める妨害工作のために通水せず、その責めを負って源助は処刑された。その後、通水を妨げていた細工が取り除かれ、用水は通水し曾根村(西蒲区)の水不足は解消された。

宝永6(1709)年、村上藩は相続問題のため10万石の減知となった。減知分は幕府領に編入されたが、村上領に据え置かれた三条陣屋支配の4万石領8か組の村々は、宝永7年から翌正徳元(1711)年にかけて幕府領への編入を望ん

阿賀野川河口と内野新川

近世中期以降、新田開発のために砂丘内側の川や潟から海への放水路が開削された。新発田藩が享保15(1730)年に開削した松ヶ崎堀割は、翌年の増水で決壊して幅が広がり、阿賀野川の新河口(現河口)になった。内野新川は長岡藩領37か村と村上藩領15か村により文政3(1820)年に通水した。西川の河床に底樋を敷設して川を立体交差させる一大土木工事で、現在も西区・西蒲区一帯の基幹排水路となっている。

在郷町と舟運

新田開発の進展と人口増加により、市域では近世中期までに葛塚(北区)、亀田・酒屋(江南区)、新津・小須戸(秋葉区)、白根・月潟・新飯田(南区)、大野(西区)、曾根・巻(西蒲区)などの在郷町が生まれた。在郷町には六斎市(定期市)が開かれた。在郷町は舟運の要所に位置しており、舟運が交通の動脈であった。

新潟上知と開港五港

江戸時代後期、新潟湊では唐物(中国製品)と俵物(北海道製品)の売買が行われていた。幕府は密輸を摘発し、天保14(1843)年に新潟町を幕府領にした。初代新潟奉行の川村修就は、海岸に砲台を築いて砲術訓練を行うなど海防に努めるとともに、新潟町への飛砂防止や風俗矯正にも取り組んだ。幕府は、安政5(1858)年の修好通商条約で、開港五港の一つとして、新潟湊を日本海側における開港場としたが、各国は水深が浅い新潟湊の開港に、すぐには同意しなかった。

戊辰戦争と新潟

慶応4(1868)年、新政府軍と旧幕府側との間に戊辰戦争が起こった。新潟港は奥羽越列藩同盟側の補給基地となり、横浜などから外国商人が船で武器を運んできた。同年7月、新政府軍が太夫浜から松ヶ崎浜(以上北区)にかけての海岸

で嘆願を繰り返した。江戸での越訴には味方組の村々(南区・西区)からも80名余が参加したが、訴えは認められなかった。4,000名もの農民たちが参加したこの騒動は、新井白石が著した「折たく柴の記」にも記述し、幕府領における大庄屋制度廃止のきっかけとなった。

明和5(1768)年、新潟町で長岡藩が課した御用金を契機とする一揆が起きた。町民の支持を得た涌井藤四郎は町の総代として約2か月にわたり町政を執行した。藩は一揆の取調べを行い、明和7年に首謀者として涌井と岩船屋佐次兵衛

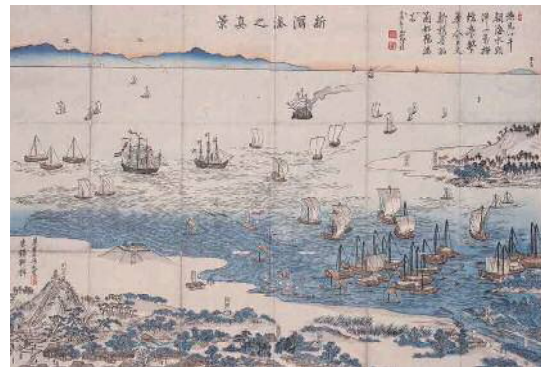


「松ヶ崎悪水吐御普請絵図」の松ヶ崎堀割部分

を処刑した。町民は彼らを義民として密かに語り伝えた。



『越後土産初編』幕末には多くの市が開かれていた



「新潟湊之真景」安政6年4月23日のジキツ号(露)とバーリー号(蘭)の様子を描く

に上陸して、米沢藩と会津藩が守る新潟町を制圧すると、戦局は決定的となった。同年9月、慶応から明治に改元し、会津藩は降伏した。